

イ

ラクの現代アーティスト、カーシム・サブテイー氏が昨年一月下旬から二月上旬にかけて来日した。イラクとの文化交流や支援事業を行なうNPO「ピースオン」(相澤恭行代表)の招きによるものだ。

カーシム氏はイラク現代アート界で重要な人物と目される。カリグラフィや絵画を制作するが、イラク戦争で破壊された書籍を用いたコラージュ作品が注目を集め、ニューヨーク、パリの個展でも高い評価を得ている。

一月二四日には、圏央道建設工事に揺れる東京・高尾山でアートセッションを披露した。

まず始めに、カーシム氏は主催者が用意した古書を用いてコラージュを作る。使う本は、布でいねいに綴じられたハードカバーのものが適しているという。氏はこれはと思う一冊を選び、おもむろに表紙を引きちぎる。

カーシム氏は語る。

「本を破るといふ行為には、きっと多くの人が抵抗感を覚えるでしょう。イラク戦争は本とい

## きんようぶんか アート

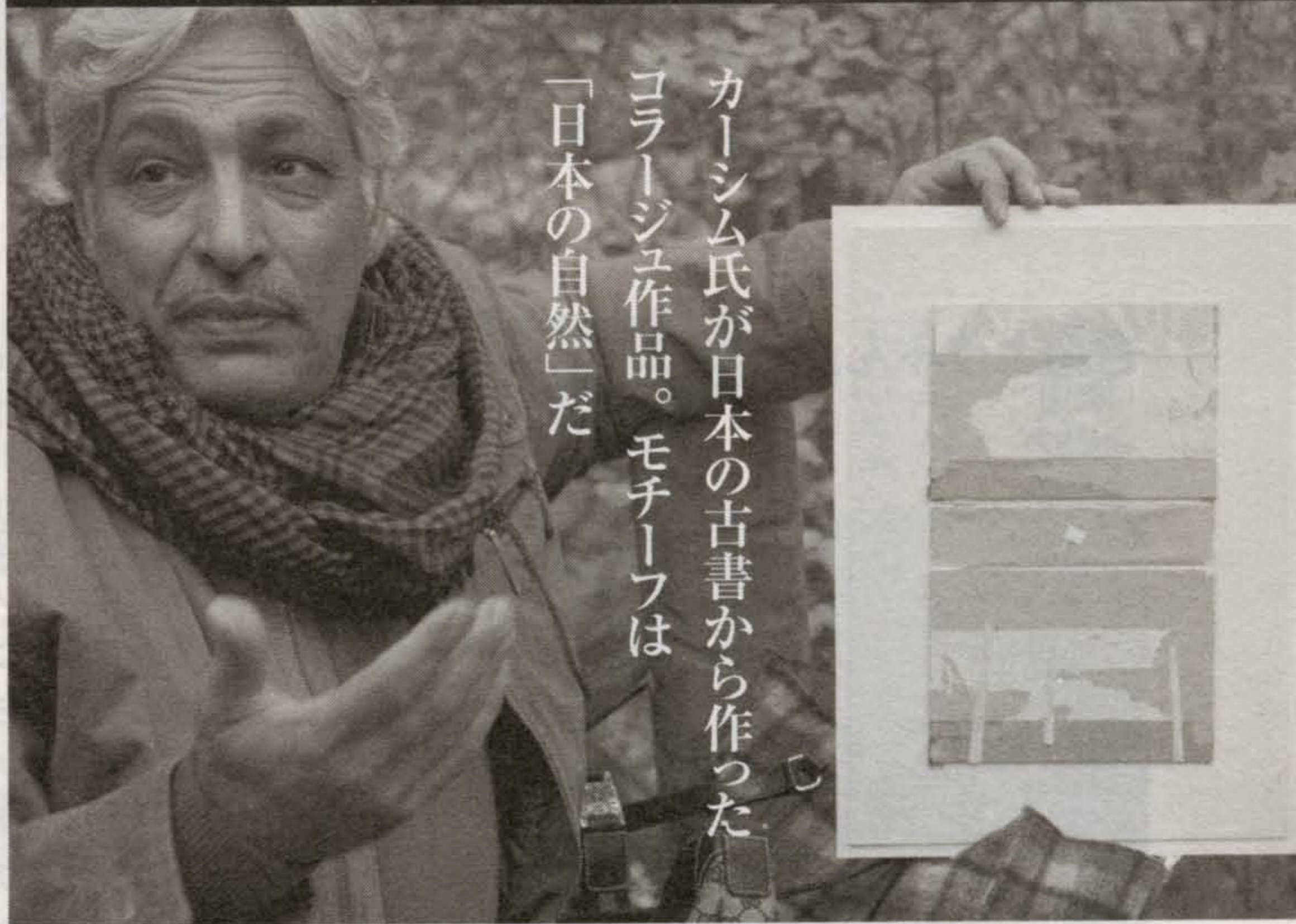
う人間の智慧の象徴を、爆撃で燃やしてしまった。コラージュを作ることで私は、そうやって破壊された本に



齊藤円華

## イラク戦争で破壊された新たな命に新たな命を授ける

カーシム氏が日本の古書から作ったコラージュ作品。モチーフは「日本の自然」だ



新たな命、新たな読み方を与えようとしているのです」

コラージュ制作は本との出会いであり、即興だ。カーシム氏は一冊一冊との出会いと発見を楽しむ。「本の汚れや虫食いが見つかると、なお面白い」。みるみる内に「日本の自然をモチーフにした」作品ができあがる。

午後からは冷たい雨の降る中、会場のツリーハウス「高尾ツリーダム」に集まった参加者の前で、カーシム氏は新たなコラージュ作りに挑む。今度は古書を用いず、氏が参加者にふるまった紅茶のティーバッグを回収して作品を作るといふ。色とりどりのティーバッグを

広げ、台紙に並べる。そして空白に搾った茶殻をまき散らすと完成だ。捨てられるはずのティーバッグが、カーシム氏の手によって、この雨空と、高尾山に茂る木々を連想させるかのような作品として命を吹き込まれる。その一連の様子に、参加者も目を丸くした。

前日から高尾を訪問していたカーシム氏は「昨日、今日とここにいることが作品に影響している。自然と対話する中で、私は作品を作りました」とこのライブセッションを振り返る。イラクでは、サダム・フセイン政権時代の文化保護政策の影響もあって芸術活動が盛んだ。

しかしイラク戦争と、その後の混乱の中で創作が困難となり、多くのアーティストが国外へと逃れている。

そんな中、カーシム氏はバグダッド(バグダード)市内で現在も画廊「ヘワール・アート・ギャラリー」を営む。カフェも併設されたこのサロンは「イラクアート界のオアシス」として、現地に残る芸術家たちの貴重な交流の場となっている。氏が「重要な人物」であるのは、自身の芸術活動も然りながら、武装勢力などの脅しに屈することなく画廊を守るといふ「存在の重み」にも拠っている。氏によれば、イラク戦争当時、

## カーシム・サブテイーさん

1953年、イラクの都バグダード生まれ。芸術家。美術院で教員も務める。カーシム氏の作品についての問い合わせはピースオンまで。作品図録やポストカードも取り扱う。☎03-6427-8583 🌐http://npopeaceon.org/

米軍が真っ先に破壊したのは図書館と美術館だった。「彼らは大学構内の書庫と映画フィルムの収蔵庫にも火を放った。アメリカはイラクの歴史と記憶を消し去ろうとしたのです」。美術書を守ろうとした氏は火の中から本を取り上げるが、焼けてしまった本は手に取ると中のページが崩れ落ちて、表紙だけが残った。この体験が、書籍を用いたコラージュ制作の契機となった。カーシム氏は作品を創造することで、破壊の業火と対峙する。開発と対峙する高尾山で、カーシム氏は豊かな森に息づく生命とシンクロしたのだ。さいとう まどか/ジャーナリスト